背教徒

塙　英夫

筑摩書房

背教徒

塙　英夫

筑摩書房

昭和二十八年二月一日印刷
昭和二十八年二月五日發行

背教徒

定價 貳百四拾圓
地方賣價 貳百五拾圓

著者 塙英夫
裝幀者 勝本富士雄
發行者 古田晁
東京都文京區台町九
印刷者 小清水俊夫
東京都千代田區飯田町一ノ一七

發行所 株式會社 筑摩書房
東京都文京區台町九
電話小石川(〇〇五一)番(營業)
(〇〇五七)番(編集)
振替口座 東京一六五七六八

太洋紙業(株)印刷部印刷・高島堂製本

背教徒

夢見る力のない人は生きる資格がない

エルンスト・トルラア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

前章　夜から夜へ

一

大氣の中に波紋を擴げるやうに、晝のサイレンが遠い廳舍の屋上から響き渡つてくると、場内を滿たしてゐた機械の騒音が一齊に止まつた。

「今日の菜は何だ？」「相變らず鹽汁だが、飯の山はいゝらしいぜ」などと囁きあひながら、いそいそと食堂に向つて急ぐ囚人の群れに混つて、佐伯は半ば放心狀態のあやふやな足取りで歩いていつた。ともすれば歩みがのろくなつて、後からこづかれたり、口汚く罵られたりしては、はつとして足を早めた。一週間前までの佐伯は、誰にも劣らぬ烈しい胃の腑の期待に喉をぐびつかせながら、彈む脚を押へるやうにして食堂に向つたのだが、この頃はすつかり食慾を失つてゐた。重い石のやうなものが絶えずみぞおちの邊に轉がつてゐる感じだ。躰の重心が腹から胸に吊り上つた風で、脚が妙に輕く、一歩一歩が不安である。が病氣なのではなく、全く恐怖からくるものだ、と佐伯ははつきり自覺してゐた。

食堂と云つても、名ばかりで、印刷機の間の通路に並べた、細長い縁臺のやうな食卓を置いただけのものだつた。佐伯達は何時ものやうにまづ正面の壁にしつらへられた神棚に敬禮した。が擔當の田口看守は次の號令をかけようとはせず、自分も脫帽し、不動の姿勢を取り續けてゐた。敬禮が終るや否や習慣的にどしんと腰を降した、せつかちな二三の囚人も慌てて元の姿勢に還つた。

そのまゝかなり長い沈默が續いた。雨滴の跡のついた窓ガラスを透して、向ひの炊事場や脫衣場の灰色のコン

川越図書館

クリートの壁や、人氣のない獄庭の向ふに聳え立つ赤い煉瓦塀が見える。佐伯はこみ上げてくる不安に耐へながら、それらの風物をぼんやり眺めてゐた。他のどの工場からも物音一つ聞えてこず、この監獄全體が巨大な墓地のやうに思はれた。

突然誰かが緊張した聲で話し出した。神棚の傍に備へつけられた擴聲器からだ、とすぐ解つた。佐伯は全神經を耳に集中した。がその聲はひどくくぐもつて、ほとんど一語も聽き取れなかつた。たゞその悲痛な調子が胸に滲みこんできた。

「着席、食事始め」

看守は擴聲器の聲が止むとすぐ命令し、默々と囚人達の後ろをゆききし始めた。その表情からは何の意味も汲み取れなかつた。昨日の朝から明日の正午重大放送がある、と云ふ話は囚人達の間にも擴まつてゐたが、するとこれがそれなのかも知れない。だがその內容は何だらう、と思ふと、佐伯は五分間に濟まさねばならぬ食事のことをも忘れて、慌たゞしく考へ廻らした。

他の囚人達も何となく不安さうだつた。原因の解らない氣候の突變に脅える群棲動物に似た表情がどの顏にも傳染してゐた。食卓を挾んでさし向ひに坐つてゐる者同志で取り交はす冗談もなく、お互ひが眼を逸らしあつて自分の中に閉ぢ籠る眼つきだ。

「おい、今の本土決戰の激勵だな」

婆婆では軍曹だと自稱する窃盜常習犯の植松が、卓越しに佐伯の隣りにゐる三谷に囁いた。それを皮切りに、あちこちから囁き聲が洩れ始めた。が何時もはひどくやかましい田口看守が、何も聞えない風に歩き續けるのが、佐伯には異樣に見えた。

「それどころか！　大本營が愈々滿洲にきて、無敵關東軍を率ゐてな、とことんまで戰ふんだつてよ。さつき廳舍から歸つてきた雜役が言つてたぞ。本當の話よ」

「うん、さうかも知れねえなあ。どつちにしろ俺達もすぐ出られるぜ」

が植松も三谷もやはり、不安さうだつた、三谷は頭のつるつるに禿げ上つた老人で、生涯の半ばを監獄で過してきた窃盗犯だが、何時も根も葉もないデマを捏造して、仲間を擔いで喜ぶ癖があつた。佐伯は今の話も頭から信じなかつたが、他の囚人達は何時ものやうに疑つたり、混ぜつ返したりしようとはしなかつた。

「さうぢやねえ。ソ聯を徹底的にやつつけろつてんだよ」

佐伯の斜め向ひに坐つてゐる山本が確信ありげに言ふと、賛同を求めるやうに邊りを見廻したが、誰も應じなかつた。鼻白んだ山本はふと佐伯の顏に視線を止めると、急に意地悪い、意味ありげな眼つきになつた。

山本も三谷や植松と同樣に、佐伯と同じ監房に寢起きしてゐる詐欺常習犯で、工場でも監房でも顏役の一人だ。

「へつ、日本が敗けようが勝たうが、こちとらの知つたこつちやねえや。俺樣が美味いものを食つて樂してゐられりや、どつちでもいゝや」以前の山本はさう口癖に言つてゐた。それが數日前のソ聯參戰以來、急に熱烈な愛國者の口振りに變つた。漸く不安を皮膚に感じ出したらしい。同時に佐伯への態度も急變した。それまでは思想犯に對する敬愛と同情、また思想犯と親しくすることによつて一般囚人に優越感を味はうと云ふ虚榮心から、佐伯には一歩讓つてゐた。それがあの日からは敵國人を見るやうな眼つきになり、佐伯が近づいて話しかけようとすると、す早くそつぽを向いたり、その場を立ち去つたりするやうになつた。二三日前の晝休みに、活字臺の蔭に數人の仲間を集めて何か話しあつてゐた山本が、佐伯が近づくと、急に口を禁んでしまつたこともある。

山本の絡みつくやうな視線を避けると。佐伯は半ば夢中で鹽汁を啜り、高粱飯を嚙つた。態度が變つたのは山本だけではない。囚人の大半が自分を憎悪し出したやうな氣がする。だがそれも典獄始め刑吏達に較べれば問題ではない。さう思ふと、脣が冷えて來るやうな恐怖に襲はれた。

その瞬間、突然或る疑惑が腦裡に閃き、聲に出すところだつた。「敗戰ではないのか？」

思はず顏を上げて邊りを見廻すと、山本は遽しく飯を貪り食ひながらも、まだ佐伯を上眼遣ひに睨んでゐた。

内心の疑念を見破られたやうな不安を押へて、佐伯は相手の視線をはね返した。

生きながら墓場に葬られたやうなこの五年間、戰局についての報道は教誨師から斷片的にしか聞かされなかつたが、日本の敗戰は明らかだつた。これが希望的觀測ではないことは、凡そ希望などと云ふものは一片も殘さず失つてゐた佐伯には確實なことだつた。

ふと佐伯は別の視線が蠅のやうにしつこく顏の上を這ひ廻つてゐるのに氣づいた。山本は何時の間にか隣りの殘飯を攫ふことに夢中になつてゐる。同じ文選場の朴と云ふ朝鮮人の窃盜犯が、佐伯の内心を見透して共鳴するやうな微笑を浮べてこちらを眺めてゐた。朴も敗戰だと考へてゐる、と佐伯は直感したが、本能的に視線を逸らした。

がすぐ今度は朝鮮人だけを選んで、一人一人見渡していつた。この奉天第二監獄は專ら日系犯罪人を收容してゐたが、朝鮮人も「日系」なみとみなしてか、半數近くが彼等だつた。その外に國境で不時着して捕へられた二人のソ聯飛行將校が、獨房に軟禁されてゐた。

今まで氣づかなかつたのが不思議なほど、朝鮮系囚人の顏には、異樣な興奮を押し鎭めてゐるやうな表情が共通に現はれてゐた。何時になく日系囚人には話しかけようとせず、彼等同志で母國語で囁きあつてゐた。間に挾まつてゐる日系の背中越しにす早く言葉を交はす者も見える。

疑惑は急速に確信に近いものに變つていつた。さう言へばさつきの放送は、聲の主は誰か解らないが、恐らく樞要の地位にある人だらう。あの聲調は戰鬪への激勵にしては、餘りにも悲痛な響を籠めてゐた。

さうだ、眞實は獄中で日米戰爭の勃發を聞いた瞬間から、佐伯は祖國の敗戰を祕かに豫想し、確信したのだ。眞珠灣攻擊の報道を聞かされた時、最初に腦裡に閃いたのは「卑怯」と云ふ印象だつた。だがそれから今日まで何と次々と希望と期待を無慈悲に打ち碎かれてきたことだらう。この頃ではもう何事に對しても複雜な思考を廻

らさずに、たゞ眼前に生起する事實だけを虚心に迎へることによつて打撃に耐へる習慣が身についてゐた。戰爭勃發當時の思考も感情も忘れて、たゞ動物のやうに生きてきたと云つてもいゝ。

それが今、深い水底に潜んでゐた水泡が水面に浮び上るやうに、數年前の記憶がふつと腦裡に蘇へつてきた。眼の前の窓から靑く輝く盛夏の蒼空が見える。身を沈めた水底から明るい水面を仰ぐやうな息苦しさに、佐伯は思はず箸を止めた。もし實際に敗戰だつたら？　その場合の心構へは全く出來てゐなかつた。

食事が濟んで、配食係が空になつたアルミ椀を集めて廻り始めた。囚人達は田口看守に引率されて、銘々の職場に引返していつた。ほんの僅かな自由を許された休憩時間も、不斷は角力を取つたり、ふざけたりして樂しむのだが、今は從順な家畜のやうに、コンクリートの床の上にぢかに坐りこみ、氣の合つた者同志寄り集つてはひそひそ話を續けた。

佐伯は獨り隅の作業臺の蔭に膝を抱へて蹲つたまゝ、考へを纏めようと努めた。が頭腦は錆びついた機械のやうに動かなかつた。ふと數日前のB29開戰の報せを聞いた瞬間を想ひ出すと、腦裡の齒車が急に目ざましく廻轉し始めた。……

その朝思ひがけない時間に不意にサイレンが鳴り始めた。一月前、B29の空襲を二回受けた經驗から、また空襲かと思つてゐると、思ひがけなく獄庭の國旗揭揚臺の前に集合させられた。乳牛のやうに肥滿したるんだ體軀の典獄が、興奮した口調でソ聯參戰を報せた。「愈々最後の御奉公の時だ」と云ふ一句で典獄は演說を結んだ。その瞬間、千五百名餘の囚人は一齊に悲鳴とも怒號ともつかぬ喚聲をあげた。廣い獄庭一杯に滿ち溢れ、周圍の煉瓦塀に烈しく木魂した。

工場に引揚げても、誰も仕事が手につかなかつたが、田口看守もとがめようともしなかつた。

「今週中に鮮系を殘して、日系は一人殘らず釋放されて前線にゆくさうだ。さつききた廳舍の計算夫がさう言つてたぞ」

金棒引きの三谷が禿頭を振り立てながら觸れ廻つた。囚人達のうち日系の大半は有頂天になつた。こゝにゐるよりは戰場に行く方がましだ、何より美味しいものが食へるし、巧くやれば女にもありつけるからと植松のやうな若い男は何時も言つてゐたが、それが愈々現實になるのだから、喜ばずにゐられない譯だつた。

だが興奮は夕方の還房時間までにはすつかり冷めきつてゐた。いざとなるとやつぱりこゝの方がいゝ。飯は不味いが鱈腹食へるし、犯則で野菜など手に入れて榮養を補つてゐれば、まづ生命に別條はない。冬の間は朝夕二回零下三十度の中を全裸で歩かねばならないのが辛いが、敵軍の十字砲火に較べれば、それほど怖ろしくはない

——そんな呟きが獨りせつせと活字を拾つてゐる佐伯の耳に聞え出した。

佐伯は全身の神經がきりきりと痛むやうな恐怖と闘つてゐた。それに耐へるために、誰もが投げ出してゐる作業に精魂を注いでゐた。がともすれば悪感が背筋を走り下つた。思想犯の俺や島本達も他の日系囚人と同じやうに釋放されるだらうか？　ひよつとすると塀の前に並ばされて銃殺されるのかも知れない。すると明け暮れ死を覺悟してゐた筈の佐伯の、日頃の悟りめいたものは一瞬にけし飛んでしまつた。

日ソ開戰すれば思想犯は銃殺だ、と云ふ噂は入獄當初から耳にしてゐたので、今さら狼狽することはない筈ぢやないか、と自分を叱つたが、どうにもならない。戰線より監獄の方がいゝと考へ直した囚人達を、今では笑へなかつた。が夕方には佐伯も幾らか冷靜を取り戻してゐた。「コムニスト、少くともかつてはそれであつた俺が、相手もあらうにソ聯軍に殺されるのでは、餘りにも悲慘な喜劇だ。むしろこゝで殺された方がましかも知れない」そんな苦しい諦めで自分を慰めた。

この五年間を通して不安のない日は一日もなかつた。監獄當局は絶えず佐伯の言動に細心の注意を拂つてゐた。看守はもとより、囚人中の或る者に意をふくめてスパイさせてゐる氣配もした。敵に襲はれると死んだ振りをする或る種の狐のやうに、佐伯は從順な模範囚を裝ふのに懸命だつたが、當局は少しも信用せず、反つて益々疑り深くなつてゆくやうだつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「模範囚になり終せて早く釋放される望みはない、と解つた。それどころか刑期をすつかり務め上げても、まだ怪しい者は無期限で拘禁する法律が出來たことを妻の藍子からの手紙で知つた。かうなると生きて自由の身となる唯一の機會は敗戰以外にはなかつた。佐伯は自分自身にも隱すやうにして、祕かに敗戰を祈つてきたのではないか。

だが本當に衷心から敗戰を希望してゐたのだらうか？　確かに希んではゐた。が同時にひどく恐れてもゐたのだ。日本の本國ならともかく、中國の一部であるこの滿洲でそれを迎へた場合、どんなことになるかと思ふと、唯一の希望である敗戰の到來を拒みたくさへなつた。滿洲は土着民衆の叛亂と暴動、復讐の殺戮が氾濫するだらう。ソ聯軍や中國軍の侵入よりもその方が遙かに怖ろしい。

さうなれば佐伯を含めて日本人の大半は殺されるだらう。新京で働きながら自分を待つてゐる藍子も危くなる。自分はともかく藍子だけは絶對にそのやうな悲運に逢はせたくなかつた。いや、やはり自分も何としてでも殺されたくない。佐伯の敗戰への待望は、全世界の人類がナチや日本の軍國主義の野蠻な支配から救はれるが故に、と云ふ高邁な意識よりも、もつと肉體的でエゴイスチックな欲求から發してゐた。敗戰を望みながら同時にそれを恐れるのもそのためだつた。

二

「集合！」慌たゞしく正面の入口から駈けこんできた部長看守が叫ぶと、工場を横切つて反對側の裏口から駈け出していつた。隣りの製革工場にゆくのだ。

休憩してゐたその場で、田口看守は囚人を整列させると、駈け歩で國旗掲揚臺に向つて急いだ。獄庭にはもう石鹼、耕耘、炊場などの囚人が方陣を作つて並んでゐた。

血腥い戰爭などどこで闘はれてゐるのか、と疑はれるほど美しく晴れ渡つた空を背景に、日章旗が血に塗れた白鳥の翼に似て、時々力なく搖れ上つては、すぐまた垂れ下つて旗竿に絡みついた。その背後にある煉瓦塀は、近づくと恐しく高く聳え立つて見える。塀の外に典獄達が詰めてゐる廳舍の白亞の塔が一層高く空の一劃を區切つてゐる。

足を停めると佐伯は輕い眩暈に襲はれた。急に烈しい陽の光を浴びたせゐよりも、長い間使はなかつた頭を突然働かせ出したためであらう。するとひよつとしたら敗戰などとは囚人固有の病的妄想なのではないか、と云ふ疑惑が湧いてきた。

横を見ると、石鹸工場に出役してゐる島本が四五列隔てたむかふから佐伯に微笑みかけてゐた。が島本も緊張し興奮してゐるらしく、こは張つた笑ひだつた。佐伯は笑ひ返さず、ただす早くうなづいて見せ、すぐ顏を正面に向けた。工場を異にする知りあひの囚人同志は顏を合せる機會が滅多にないので、こんな仕草は何時もなら當り前のことなのだが、今は島本みたいに虛心には出來なかつた。囚人の中にゐるスパイの密告が怖い。いや、自分以外の何者をも、かつては友であり同志でもあつた島本さへも信じられなくなつてゐる。今まで幾度か思ひがけない裏切りを見せつけられた經驗があつた。肉體的苦痛に對する人間の忍耐力には限界があるのだから、それも止むを得ない、と理性で考へながらも、感情は抑へきれなかつた。

佐伯が出役してゐる印刷工場に續いて、製革工場の一隊が傍に並び終つた時、四五人の看守長を從へた典獄が炊事場の建物の蔭から現はれた。國旗掲揚臺の眞下にある演壇に上りかけた瞬間、典獄は急によろめいて地上に倒れかゝつたが、看守長の一人がす早く駈け寄つて危く抱き止めた。佐伯はぎよつとした。それは偶然な出來事ではなく、今日の集合の意味の重大さを暗示するかのやうであつた。囚人達の間にも低いざわめきが起つたが、すぐ止み、沙漠の只中のやうな靜寂が支配した。

「皆さん」

かつて聞いたことのない、女性的なかん高い震へ聲が典獄の口から洩れた。こんな敬稱に屬する呼び方も始めてだつた。そのまま暫く押し默つて、象のやうな眼をしよぼつかせながら、言葉を探す風だつた。

「悲しい事實をお報せしなければなりません。日本は本日無條件降伏しました。もう何もかもお終ひです。しかし皆さんは必ず無事に日本に歸れるやうに計らひますから、安心して靜かにしてゐて下さい。これ以上私は……何も言へません」

典獄はふいに顏をくしやくしやにすると、慌たゞしくあちこちとポケットを探つて、ハンケチを探すらしかつたが、すぐ止めて、片手で眼を覆ひながら、また看守長に助けられて降壇した。

靜寂が一時に破れて、あちこちから烈しい啜り泣きが起り、忽ち合唱めいた單一な調子に統一され、刻々と高調子の號泣にせり上つていつた。が佐伯は泣けなかつた。泣かないと危いと云ふ考へが閃いたが、今それはこの上なく恥づべきことに思はれた。頭の中は烈しい目まぐるしさで廻轉してゐたが、一つの想念さへ捕へられず、むしろ虚ろに似てゐた。喜びも悲しみもなく、ただ耐へがたい疲勞に倒れさうだ。樣々の色が混りあつてどす黑くなつてゐた頭腦が忽ち無色透明に化したやうである。

恐る恐る横眼遣ひに邊りを見廻すと、はつとした。今囚人の大群は、陶然と自分の泣聲に耳を傾けてゐるやうな者と、葬儀のお義理の參列者のやうに演技的なしめやかさを示しながらも、燃えるやうな眼を足許の地べたに注いでゐる者と、この二種類に分れてゐた。泣いてゐるのは日系で、朝鮮人は泣いてゐない。彼等は突然眼の前に出現した祖國の獨立への期待に胸を轟かせてゐるのだらう。

ふと隣りで子供のやうにしやくり上げてゐる朴に氣づいた。晝食の最中に笑ひかけた男である。瞬間、佐伯は自分の眼を疑つた。がそれとなく觀察すると、ごく僅かだが、朴と同じやうに泣いてゐる朝鮮人が見られた。日本の敗北に朝鮮人が、わけてもさつき笑ひかけた朴のやうな男がなぜ泣くのか？　それとも祖國解放の嬉し泣きなのだらうか。

やがて佐伯は氣づいた――さつきの朴の微笑は習慣的な親愛の表示に過ぎなかつた。そして今の涙は正しく敗れた日本のために流されてゐるのだ。日本の朝鮮民族に對する愚昧化政策は佐伯の想像以上に徹底してゐるので、朴等は今もその影響から脱けられないでゐるに違ひない。佐伯は痛ましくなつて、思はず顏をそむけた。

だがもう人のことを氣に病むどころではない。冷靜に自分のことだけを考へればいゝのだ。とにかくどうにか自由の世界に歸れさうだ。それまではどんなことをしても生き拔くことだ。藍子や、遠い故郷の兩親の顏が次々と明滅した。歡喜がどつとこみ上げてきた。がすぐ前よりも鋭敏な警戒心が働き始めた。囚人は泣いてゐる日本人と少數の朝鮮人、泣かない朝鮮人に大別されるが、そのどちらにも屬さない者がゐる。それが佐伯自身だつた。首を伸ばして島本の方を覗くと、島本はさつきから待ちかねてゐたやうに、また笑ひかけてきたが、今度はさすがにすぐ笑ひを消して顏をそむけた。囚人群の號泣はやゝ低まりながらも、いつまでもつづいてゐた。

佐伯はやり場を失つた眼を空に向けた。その靑い色はいつもより遙かに美しかつた。薄汚れた灰白色か、黑以外の色彩はどこにも見當らないこゝにゐる間、美しい色に餓ゑきつた眼を少しでも癒すために、佐伯は外に出される度びに、空の色を貪るやうに眺めるのを樂しみの一つにしてきたが、今ほど美しいと思つたことはなかつた。

今日から過去とは別個の新生が始まるのだ。歷史と云ふ巨人が、地上の凡てを一變させた。過去のどんな世界史的大事件もこれに較べれば些細なことに思はれる。永久不變と見えた日本の專制制度も脆くも瓦壞するに違ひない。二十歲の學生時代にコムニストになつてから今日まで、迫害の絕え間がなかつた佐伯は、頭では「歷史の必然」を信じながらも、いつの間にか迷信的な氣持に陷つてゐたのだが。

この監獄に一緒に投ぜられ、途中で死んだ三人の同志のことが思ひ出された。がすぐ俺だけは生きてゐたと云ふ歡喜がこみ上げてきて、そんな悲しみは忽ち忘れてしまつた。そして今少しでも涙ぐんだことは、後で云はばアリバイになつて　俺を助けるかも知れない、と狡猾に計算した。死んだ同志の追憶に滲んだ涙が、敗戰のためと見誤られることを祕かに望んだ。

突然佐伯は烈しい自己嫌悪に陥つた。何と云ふ卑劣さ。そしてかくも長い間身を守るために、婆婆では平凡善良な市民の、こゝでは模範囚の假面をかむり續けて來たとは！　自分も知らぬ間に、假面なしの素顏では人に向へない人間と化してゐるのではないか、と不安になつた。

だがまだ、いや今こそ假面が必要なのだ、と佐伯は嫌悪に耐へて自分を勵ました。

何人もの囚人が次々と背をもたせかけてきたために、一定の間隔を置いて剝げ落ち、どす黑く汚れてゐる暗綠色の壁。佐伯はその片隅にもたれて胡座をかいたまゝ、身じろぎもせず耳を傾けてゐた。遠い潮騷に似た物音と、それに混つて時々聞える大地を叩くやうな鈍い響の正體を捕へようと懸命だつた。

鐵格子のはまつた窓の、觀音開きのガラス戸は左右に開かれて、まだ明るい空が隣りの第二棟の屋上に擴がつてゐた。集合を解散すると、もう作業は永久に終りとなり、すぐ監房に入れられた。

「畜生、まだ鍵なぞかけてやがる。馬鹿の一つ覺えだ」

山本が出歯の口を一層尖らせながら言つたが、誰一人應じる者もなく、同房の囚人達は銘々思案に耽つてゐた。鍵はかけてあるが、看守の影が見えず、時々雜役が廊下を急ぎ足に通るだけだ。十疊ほどの廣さの房内には十五名の囚人が、壁にもたれたり、胡座をかいたり、思ひ思ひの姿勢で亂雜に並んでゐた。一段低くなつてゐる中央の通路を監房長の三谷がぶらぶらしてゐた。誰もあの物音には氣づいてゐないやうだ。

響は外で中國人の民衆が暴動を起してゐるのではないか？　するとやがてこゝにも押しかけてくるかも知れない。佐伯は不安に耐へて押し默つてゐた。そんなことを洩らさうものなら、どんな騷ぎになるか知れたものではなかつた。不斷でも拘禁生活の不自然さから、狂氣じみてゐる彼等のことだ。

「關東軍はどうしやがつたんだ。だらしねえなあ」

三谷が上り端に片脚を踏まへて。柿色の筒袖の囚衣の裾を捲り上げると、ヒステリックに怒鳴つた。

「關東軍が降伏したと誰が言つた？　いや、きつとゲリラ戰をやるぞ」
植松が腕組みしたまゝ貧乏搖ぎしながら言つた。
「さうだ、俺も出たら馬賊になつて暴れ廻つてやる」
三谷が藥罐頭を振り立てゝ力んだ。
「だめだよ。關東軍なんてごぼう劍と木銃しきやねえ兵隊ばかしだよ」
山本が嘲るやうに言つた。
「まあ出て見ねえことにや話にならねえ。早くしねえと、ソ聯軍がきてしまふぜ。そしたら捕虜になるか殺されるかだ」
三谷がやけに緣のはめ板を蹴りながら言つた。ソ聯軍が東部と西部の國境から急速に進入しつゝある、と云ふ噂は數日前から傳はつてゐた。ソ聯軍が全滿を占領すれば、治安も修まり、ひよつとすると土着民衆の暴動も下火になるかも知れない。そして俺自身の釋放も近づくだらう、と佐伯は考へた。
「ところがソ聯軍が早くくればいゝと祈つてる奴もゐるんだぜ。それも日本人なんだから呆れ返るぢやねえか」
反對側の壁にもたれて脚を投げ出してゐる山本が言ふのを聞くと、佐伯ははつとして山本の顏を見た。山本の方でも佐伯を見返した。
「誰だ、どいつだ？」
三谷が眼を剝いて怒鳴つた。
「決つてるぢやねえか。思想犯よ。石鹼工場の島本なぞにやにや笑つてけつかつたぞ。いや、俺達が泣いてゐる最中に、朝鮮人だつて泣いてるのに、思想犯の連中は皆泣かなかつた。いや、佐伯さんのことは知らねえがね」
「いゝなあ、五〇五番は。今にソ聯軍から自動車で迎へにくらあ。その節は宜しく願ひますぜ」
三谷が羨望と憎惡を一緒くたにした表情で、佐伯の顏を覗きこんだ。三谷も山本と同じやうに人一倍佐伯に好

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.